

# “縁”は奇なもの—麻山事件と東京開拓団をめぐって

高橋 健男

“縁”は奇妙なもの、『星火方正』第 11 号で三つの“縁”を得た。

ひとつは『星火方正』第 11 号の拙稿 (p.100) で触れた、麻山事件で「自決」した弟さん二人の消息を尋ねる新潟市在住の小出公司さんに関する事。小出さんの弟さん二人、昭和 8 年生まれの正平さんと昭和 10 年生まれの元也さんは、<sup>へんろく</sup> 哈達河開拓団新潟部落に入植していた伯母夫婦の養子になっていた。昭和 20 年 8 月 10 日、ソ連軍の満州侵攻を受けた哈達河開拓団は<sup>ジューシー</sup> 鶏西に向けて避難を開始した。北海道に住む鈴木 (旧姓高橋) <sup>ゆきこ</sup> 幸子さん (終戦時 8 歳、麻山事件で母と兄弟姉妹を亡くす) はそのとき、「新潟部落の<sup>あずま</sup> 東さん一家の馬車に乗せてもらった」のだという。「東」の姓は小出さんの伯母夫婦の姓である。

自分がいっしょに避難した家族、小学校仲間の名前が『星火方正』に出ており、それを読んだ鈴木幸子さんは大類善啓事務局長に電話し、拙宅の電話番号を教えてもらった。北海道からの突然の電話で「何か？」と思ったが、興奮気味にお話される鈴木さんのおっしゃることを聞いているうちに、鈴木さんが麻山事件の生き残りの子供の一人であることに思い至った。鈴木さんのこと、鈴木さん姉妹のことは中村雪子『麻山事件』、合田一道の『開拓団壊滅す』などの連作、<sup>あずま</sup> 箕口一哲『開拓団の満州』などを通して知り得ていた。

鈴木幸子さんはご自身が世話になった<sup>あずま</sup> 東一家の名前を『星火方正』で見て、65 年前の記憶が鮮明によみがえってきたという。小出公司さんは弟さんたちの消息を求めているのだが、鈴木さんはその家族がおられることを知って、ぜひともお話したいという。両者にとっては何よりのことで、私は鈴木さんに小出さんの電話番号をお知らせした。小出さんにとっては今までの私からの情報をはるかに越える、詳細な弟さんの消息を知ることができると考えた。案の定、鈴木さんとの電話は「1 時間にも及んだ！」と、その翌日小出さんから「よい知らせです！」と電話があった。

ここから“縁”はさらに発展する。小出さんは「ぜひとも鈴木幸子さんに会わねば」との思いが募る。加えて在満国民学校で弟さんたちが世話になった岩崎スミ先生も、どうも近くにお住まいらしい。小学校時代の弟たちの姿を岩崎先生からも得たいのだ。小出公司さんにとって弟さんの面影は、まさにその時代のままであるからだ。これらもろもろの経緯の詳細は、小出公司さんに寄稿をお願いしたのでそちらをごらんいただきたい。

\* \* \*

二つ目の“縁”も哈達河開拓団、麻山事件に関係することである。

大類事務局長が『星火方正』第 11 号で「小説に初登場した方正日本人公墓」と題して、佐江衆一著『昭和質店の客』を紹介された (p.110-111)。方正日本人公墓を知りえた小説家が日本人公墓をどのように取り扱っているかに興味を持ち、購入して読了した。すると、小説の主要人物の一人が、麻山事件で家族 (妻子と父親) と開拓地での隣の家族一家を「自決させてやった」当人という設定であることが分かり、「これは！」と一気に読み進めた。

開拓団や事件のことを小説化して書いているので、哈達河開拓団が「共栄開拓団」、貝沼洋二団長は「長谷川洋一」、当時の青年学校生・納富 (旧姓・吉岡) 善蔵は「富岡少年」、衛藤通夫国民学校長は「高田」姓に、福地靖医師は「菊地医師」に、木村辰二警察隊長は

「鈴木」にといった具合に変更されている。ただし、事件を語るには地名をたがえることはできず、麻山谷、鷄西、林口、東安、穆稜河、牡丹江河など、位置関係も正確に説明されている。

最初興味深かったのは「共栄開拓団」という名称で、実は同名の「共栄開拓団」が新潟県送出の開拓団の中にあり、第 12 次で三江省湯原県入植だった。新潟県が送出した開拓団の実際に触れられると期待して読み始めたのだが、前述のように小説化のための名称設定であった。方正日本人公墓については建立経緯の概略がさらりと説明されているだけだった（『昭和質店の客』p.63）。ただし、全編を通じて大正・昭和初期の人々の暮らし、人情味あふれる下町の庶民の交流などが具体的に描写されており、時代背景の理解を助ける。

事件について著者は「中村雪子著『麻山事件』に負うところが多い」とあとがきで触れている。また、大平壮義編著の団史『麻山の夕日に心あらば』をも参照しているので、開拓団や事件の具体的な様相に関しては史実に忠実である。しかし、ただひとつ設定として無理があると感じたところがある。主人公は麻山での斬り込み隊の一員でソ連軍機甲部隊へ突撃したのだが、頭部を負傷して意識を失い、気がついたときは捕虜になっていた。その捕虜収容所が北満の北安の収容所だという。これが少々無理な設定である。鷄寧付近で捕虜となったとしたら、入れられるのは牡丹江、拉古収容所あたりが妥当であろう。北安はハルビン北方約 400 キロの地であり、捕虜となった地点からそこまでの移動や移送は現実離れしている。著者はわざわざ、その収容所には「私の共栄開拓団の男たちの姿はありませんでした」と主人公に断らせているが、新潟県送出の共栄開拓団員であったならば、綏佳線（綏化—佳木斯間）を使って綏化に出、その後北安に送られることはあったであろう。しかし、それもこの小説の設定上つじつまが合わない。残念な設定のひとつであった。

驚いたこと、うれしいことがあった。著者が上記の参考文献を示した後、「他の参考資料」として拙著『満州開拓民悲史』（批評社）を一覧に掲げていたのである。拙著には麻山事件と麻山地区日本人公墓、方正地区日本人公墓についてそれぞれ一章ずつ設定してあるが、その内容が少しでも小説家の役に立ったことは望外の幸せである。

『昭和質店の客』の主人公に関してより重要なことは、麻山事件の生き残り、「自決をさせた」側、斬り込み隊員であった柳田保男の心情である。彼は、「いかに詫びたところで、許されないことは知っています。いかに後悔しても、あの子たちが生きてもどってくることはありません。だったら、子殺しの父として生きつづけてやろう」（同 p.51）という心で生き続け、今は 90 歳を越して“あのとき”を生々しく思い起こしている。それは「国家や尊敬した人間から裏切られた」「私」（同 p.32）の独白でもある。

そしてもうひとつの重要なことは、事件そのもの、自決についての次の心情であろう。「妻や幼い子供たちを銃剣で刺し殺して『自決』させたはずはありません。死にきれずに苦しむ者を日本刀か短剣で介錯して楽にさせたとは思いますが、女子供を惨たらしく銃剣で刺し殺したり突き殺したりはしないのです。青酸加里を持っていたなら、水盃を交わしてから飲ませたかったところですが、持っていなかったのも、私は銃を使いました」、「いえ、『殺した』のではありません。『自決』させたのです。自決させなかったら、ソ連兵に子供たちは虐殺され、婦人たちは強姦された上で殺されていたでしょうから」（同 p.26）。また、「あれは、美しい自決などというものではなかった」とも記す（同 p.47）。

小説にわざわざ「あとがき」が付くのはめずらしい。わざわざ付け加えるにはそれなり

の意味があるはず。著者・佐江衆一は、「この小説は、戦争を少しは体験した昭和戦前生まれの私が、死ぬまでに書かねばと考えていた作品です」と記している。「あとがき」のこの後の数行は、人物設定、戦場や事件、シベリア抑留の実情等に関して、他の著作から借りてその上で創作したことを断っている真摯な文章である。

問題は、というか主眼は、最初の一行にこそある。著者は「戦争を少しは体験した昭和戦前生まれ」と自己紹介する。すると、戦場体験や抑留体験を持っているわけではなさそうである。満州開拓団に関してもその当事者であるとは思えない。ただ、東京の浅草・向島界隈で育ち、関東大震災は経験しなかったものの、東京大空襲を経験した。空襲戦災家族の一人であろう。そうすると、太平洋戦争の勃発から終焉まで、まさに戦争のさなかを若い時代に生き抜き、戦後は焼け跡のバラック生活、食糧確保の格闘、戦災住宅・引揚者住宅の人たちの様子など、当時の社会の姿のすべてを経験している。

その中で著者が感じたのは戦争の理不尽さであり、戦後の混乱の中の混沌、生き抜くことなどの問題であったのではないか。著者は2年前に中国東北地方を旅したときのエッセーを、「東京大空襲を生きのびて作家になった者として満州を含む『昭和』という時代を書ききらなければ死ねないと思っている」と結んでいたという（『星火方正』第11号 p.110、大類事務局長の紹介）。その著者の思いは主人公三者三様の描写の中に込められており、『昭和質店の客』に著者が見た日本の戦前、戦中、戦後が活写されている。

\* \* \*

三つ目の“縁”は吉川雄作さんがまとめられた「飯白栄助さんのお話」の中にあった。昨年度の総会には残念ながら参加できなかった私は、お話を聞くことがなかった。今回その記録を『星火方正』に悉皆記録的に掲載していただいて感謝申し上げます。

この講演記録に興味を抱き“縁”を感じたのは、私自身も都内を動いて慰霊碑等を確認した武蔵小山・朗惺寺にある東京荏原開拓団、東京からのもうひとつの開拓団・哈拉黒仁義仏立開拓団（慰霊碑は八王子・乗泉寺別院霊園内）のこと、「東京の満蒙開拓団を知る会」の存在などに関して話題が展開していたことである。坪川秀夫「興安東京開拓団の最後」も読んでいたので、その中の飯白竜子さんがお姉さんではないかとも考えた。

長野県が満州開拓団や青年義勇隊を送り出したトップの県であることは知られているが、東京都に関してはどの程度知られているのであろうか。送出人数に関しては第1位の長野県が37,859人（開拓団員31,264人、義勇隊員6,595人、人口比11.8%）、第2位の山形県が17,177人（開拓団員13,252人、義勇隊員3,925人、人口比5.8%）、以下数値は示さないが熊本県、福島県、新潟県、宮城県、岐阜県と続く。長野、山形両県以外の県では送出人数は当時のその県の人口に対して約8~9%である。大都会の東京都は「満州移民などないのではないか」「数は少ないだろう」と思われがちだが、何と送出人数においては全国第9位、合計11,111人が満州に送り出され、開拓団員9,116人、義勇隊員1,995人と記録されている。満州開拓というと農村疲弊、経済恐慌・貧困、農家の二・三男対策といった面が強調されがちだが、東京都からこれだけの満州移民があったということは、満州移民に関しても多角的に考察しなければならないことを示している。事情は多々あった。

私は新潟県が送出した全65集団（開拓団+義勇隊）についてその全貌を詳述するために、全国各県におけるその県の『満州開拓史』の編纂状況を調べた（『星火方正』第7号

参照)。新潟県送出の開拓団が隣接した他県開拓団と避難行動を共にしている例がいくつもあり、その状況を確認するために参照したいと思ったからの調査だった。各種検索や知人の助けを借り、現在までのところ 20 県ほどで過去にその編纂がなされていることを確認している。逆に約同数の県においては編纂がなかったことも分かった。残りの数県についてはその存在の有無を未だ確認できていない。

東京都では『東京都満州開拓史』なる書籍を発見できない。いくつかの情報からは、その編纂がなされていなかったのではないかと考えられる。飯白栄助さんのお話の中にあつた「東京の満蒙開拓団を知る会」では、「21 の開拓団と満蒙開拓青少年義勇軍が中国東北部に送り出された」とする（インターネット検索より）。2007 年に発足した会らしいが、近々に『東京都満州開拓史』として研究成果をおまとめいただければありがたい。

\* \* \*

1946（昭和 21）年夏から始まった組織的な引揚げ事業の結果、同年末までの大量帰国となり、朝鮮戦争後の 1953（昭和 28）年末までに残留婦人・残留孤児、中共留用者を除いたほとんどの満州開拓民が帰国した。それに伴い国でも県でも、特に各県においては同県人の動静を正確に把握するため、満州開拓団・義勇隊開拓団個々の実態調査を行った。各集団からは「開拓団実態調査表」「義勇隊開拓団実態調査表」、「開拓団員名簿」「殉難者名簿」といった各個人の状況まで把握できる書類・報告が各県庁に集約された。別に調査会を実施して調べた場合には、各県でその「調査資料」が作成された。

各県で集約された文書は、自県の開拓団に他県出身者が加わっていると分かった場合、その出身県に集約文書を送付し合つたらしい。新潟県庁に保管されている開拓団・義勇隊関係文書をチェックしてみると、他県関係の文書は厚さ 4～5 センチの綴り 7、8 冊にまとめられており、その文書数は優に 100 を超える。いくつもの文書、他県送出開拓団記録の中に、2、3 人あるいは数名・数家族といったように新潟県人を見出すことができる。

東京荏原開拓団の分厚い「開拓団実態調査表」をその文書綴の中に見つけた。また、戦後設立された新潟県開拓民自興会も独自に各開拓団員名簿を集約していたが、最後の自興会長自宅に残る「新潟県満州開拓民殉難者名簿」の中に、東京荏原郷開拓団の新潟県人名簿があつた。その名簿には新潟県人 13 家族、独身 6 名、計 37 名の氏名が記されている。これだけの新潟県人が東京都の開拓団に参加していた。

これには少しく説明が必要なのだが、たとえば荏原郷開拓団の団員はほぼ農業経験者ではなく、町場の商工業者だった。このような人たちで構成された満州開拓団を「大陸帰農開拓団」「転業開拓団」と呼び、満州で農業を志すことに人生設計を変えた人たちの集団であつた。そんな場合、多少の農業経験のある縁故者を全国各地に求め、それに応じた人たちが転業者の集団に加わつたらしい。こんなふうに東京都が送り出した満州開拓団に新潟県人が関係していたのだった。

以上、『星火方正』第 11 号に触発された 3 つの事柄について記した。

（たかはし・たけお：1946 年、新潟県見付市生まれ。本会会員、『満州開拓民悲史』『新潟県満州開拓史』著者）